

「分科会活動のお知らせ」

山本一成

創立十八周年を迎え、この4月から当クラブの活動の更なる発展を目指して通常の定例会に加えて分科会活動を積極的に展開する事に致しました。

毎月例会や昼食時の会話の中からこぼれ落ちる会員の方々の話の内容には興味津々で思わず耳を傾ける事が多々あります。このことは会員の皆様も同様に感じておられることだと思えます。

六十名を超える会員の方々の知識を集めたら当クラブは「知識の泉」「宝箱」のようになっています。この泉を個々の会員の心のうちに閉まっておくのは「大変もったいない」事だとの思いに至りました。

この思いを基に、通常の定例会とは別の「分科会」の設立を企画した次第です。テーマを絞り、じっくり時間を使って発表して頂ける機会を設けることによって、多士済々なる会員が有する、その知識、経験、感性を披露して頂ける事は大変有意義なことであると思えます。

従来より「オペラ鑑賞会」と「映像研究会」の2つの分科会が既に設立されており、その活動も不定期ながら開催を重ねてきて現在も継続しております。つまり分科会運営の下地は作ってはきたのです。しかし、現在までその参加者は毎回固定化しており全員への広がりには足りない想いがありました。そこで多くの会員に体験をして頂くように、「魅力ある分科会」しかも「会員による自主講座」の創設を企画し準備を重ね、愈々この4月から

「分科会」による自主講座の創設を企画し準備を重ね、愈々この4月から「室内楽おもしろ講座」がスタートします。

大変ワクワクする講座内容です。

続いて5月からの分科会の講座内容も既に固まっており、音楽ソフト及びオーディオ装置に関するものなど多岐にわたる「魅力のあるもの」そして参加して豊かな気分になる「分科会を目標しており、皆様にもきつと満足頂けるもの」と自負しております。それには皆様のご協力が不可欠です。どうかよろしくお願いたします。

『オーディオと私』

東京・江古田、武蔵野音楽学校の直ぐ近くにあって我が家のオーディオ機器は、真空管4球の「お座敷電蓄」だった。父の専用（戦後、私が奪取！）で、竹針を切ってはレコードを掛けていた。木製のキャビネットいっぱいSPレコードの中から父が得意気に取り出して聴かせてくれたのは、シャリアピンの歌う「蚤の歌」（ムソルグスキー）だった。

けれど、あの「ワッハッハ、ワッハッハ」のどこがいいのか、小学校に入りたての子供にはさっぱり分からなかった。戦時中のあることとあり、ともかくもクラシック音楽とのこれが出逢いだった。

部屋の欄間にはベートーヴェンのデスマスク（勿論、石膏の複製だが）が掛けてあり、あらびすのレコード解説書が本棚から覗いていたから、医学博士だった父はかなりの音楽好き、レコード好きだったように思う。

中学、高校時代には、仲間を語らって出始めたばかりのLPをレコード会社（複数）から借り出し、学校の教室や公民館などでレコード・コンサートを開いた。機材は友人自慢の自作機だった。なんのことはない、AAFCと似たようなものではないか。当時の仲間には、長い間練馬区の混声合唱団の団長を務めた人や、齢七十を過ぎても「エリヤ」や「パオロ」の合唱に参加する人、同じく「サカス妃殿下」などオペレッタの Aria を舞台で歌うのを楽しみにしている人、ソニーの録音技師を長く勤めた人などがいて、今でも年一回は集まって音楽談義に花を咲かせる。

なにもしないで家でゴロゴロしているのは私だけだ。その私が我孫子へ引越して来たのは1977年の暮だから、三十五年も前だ。尤も転勤などで途中十五年も留守にしていたから、実質二十年の我孫子暮らしということになる。

機材は、長い間ソニーの「セレブリティー」を使っていたが、これって結構珍しいものではあるまいか？ 現在はBOSEに切り替えた。それと同時にLPを聞かなくなってしまった。

いずれにしろ皆様の愛機に比べればお粗末なのは百も承知だが、マンシオンでは大音響が憚られるので致し方ない（マンシオン住まいの会員の方々はどうか対処されているのか、教えていただきたい。それともいいのかな）。従って当会の存在をチラシで知ったときに思ったのは、「広いところで大きな音でクラシック音楽を聴けそうだなあ」だった。この程度でオーディオ・ファンを名乗った、どなたかに怒られそうだが、本当のところだ。

肝心の音楽についても、いい加減なものだが、現役時代は通信社の記者だったので、ロンドン、ボンに各三年間駐在、それなりに欧州のナマの音楽を聴いた。その中では、ピエル・ブーレーズ指揮のBBC交響楽団による「モーゼとアロン」（演奏会形式）が記憶に残っている。場所はロンドン、チームズ川南岸のロイヤル・フエスティヴァル・ホール（私はこの会員だった）、1975年（？）のことだ。ブーレーズの着（燕尾服ではなかった）の赤い裏地が身体の動きにつれてチラチラ見えたのが珍しかった。ブーレーズはバイロイトでも聴いた。

祝祭劇場開場百年祭に夫婦して手づらで乗り込み、「指輪」を途中から観たのである。首から「チケット求む」の看板をぶら下げて、切符を入手したので、今思うと物凄いことをやったものだ。

ボン（当時は西ドイツの首都）では、ベートーヴェン・ハレによく出掛けた。このホールは83年の夏に火事で焼け、年末の「ベートーヴェン・フェスト」（2年に1回開催）は、前庭にテントを張り、そこで開いた。当時のハレ・オーケストラのコンサート・マスターは岡山潔氏（帰国後は、三年前まで東京芸大教授）で、ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲を演奏したのでよく憶えている。十三歳だった私の娘が、腕いっぱいの花束を抱えて舞台下からそれを手渡したからである。



田邊 克彦

社会民主党の党大会を取材に行つたときには、シュミット首相（当時）のLPを買わされた。

エッセンバツハ、フランツと共演したモーツァルトの「3台のピアノによる協奏曲」である。彼の演奏料は、そのままアマネスティ・インターナショナルに寄付するという事だったから、立派なものだ。出張先のウイーンでは、シエーンベルクの奇抜な墓に驚いたが、それよりもハイリゲンシュタットを基点に「田園交響曲」の小川を一人で散歩したのが忘れられない。ベートーヴェンの胸像以外には誰にも会わなかった。それくらい静かだったのだ。

ハンザ同盟の女王リユベックでは、教会で市長と一緒に古楽器の演奏を聴いたこともあったが、なにせ木の椅子で寒かった。

いずれにしろ昔話だ。AAFCではずっと聴き役でいたい。もう七十七歳だから！ ドイツ語は怪しくなつたし、海外旅行も億劫になつたし、バイロイトへ案内してくれた旧友もドイツから四十数年振りに日本へ帰ってきたことだ。